

2023年
教員お薦めの本

中央図書館



BOOKをクリックすると
本の詳細画面が開きます

BOOK

人文学部・法学部・経済学部・商学部
の先生方のお薦め本を紹介します。

紹介文を参考にしながらじっくり読
んでみるのはいかがでしょうか？

人文学部

BOOK

シャーロック・ホームズの冒険

アーサー・コナン・ドイル著；小林司, 東山あかね訳

シャーロック・ホームズは、イギリスの作家サー・アーサー・コナン・ドイルが生み出した、世界で最も有名な「架空の」探偵です(こう書くと、熱心なホームズファンに怒られるかも知れませんが)。最近では人気のスマートフォン向けゲーム、Fate Grand Order にも重要キャラクターとして登場しますので、作品を読んだことがなくても、名前だけは知っている、という人も多いでしょう。また、多くの学生さんになじみの深いコナン君(名探偵コナン)も、この作者ドイルの名前からとったものです。

ドイルはホームズの登場する作品を、短編 56 作、長編 4 作の合計 60 作生み出しました。本書は、そのうち最初に世に出た「短編集」です。一口にホームズ作品と言っても実に様々で、非常に面白いものもあれば、率直に言ってつまらないものもあります。この短編集は、ホームズ作品の中でも出来が良く、かつ知名度の高い作品が多く含まれており、ホームズ入門としては最適です。名前だけは聞いたことがあるが、ホームズの原作を読んだことがない、という方に、最初に読むべき一冊として強く推薦します。

渡部智也先生

BOOK

シャーロック・ホームズ絹の家

アンソニー・ホロヴィッツ著；駒月雅子訳

シャーロック・ホームズは、イギリスの作家サー・アーサー・コナン・ドイルが生み出した、世界で最も有名な「架空の」探偵です(こう書くと、熱心なホームズファンに怒られるかも知れませんが)。最近では人気のスマートフォン向けゲーム、Fate Grand Order にも重要キャラクターとして登場しますので、作品を読んだことがなくても、名前だけ知っている、という人も多いでしょう。ドイルはホームズの登場する作品を、短編 56 作、長編 4 作の合計 60 作生み出しました。これらはホームズファンの間では「正典」と呼ばれています。別の言い方をすれば、「オリジナルの作品」です。ですが、ホームズが登場する作品はこれだけではありません。ドイル以外の、そして彼より後の時代の作家たちが生み出したホームズの活躍する作品、いわゆる「パスティーシュ」(模倣)作品と呼ばれるものは無数に存在します。

前述の Fate Grand Order に登場するホームズ及び彼に関連して描かれるエピソード(1.5 部の新宿編など)も、パスティーシュの一種と考えて良いでしょう。そのような作品の中で、コナン・ドイル財団がお墨付きを与えている数少ないパスティーシュ作品の一つが、この『絹の家』です。推薦者は本書が出版されて間もない頃、原書で読みましたが、ホームズシリーズの雰囲気余すところなく伝えるとともに、その内容に感動したことを今でもよく覚えています。『シャーロック・ホームズの冒険』を含むホームズの正典をあらかじめ読み、次にパスティーシュに手を出したいと思った方に勧めたい一冊です。

開田奈穂美先生

ゼロからトースターを作ってみた

トーマス・トウェイツ著；村井理子訳

BOOK

ありふれた安価な工業製品であるトースターを、ひとりで原材料から作ることは可能なのか、実際にやってみた過程を記したノンフィクション作品です。「ゼロから」というタイトルのとおり、まず鉄の部品を作るために鉄鉱山に行くところから始まるから驚きです。しかも作者はお金も機械も持っていない芸術系の大学院生。あきらかに無茶なことを、だましましやっつけていく過程で見えてくるのは、私たちが今暮らす、高度化し細分化された社会のあり方です。平易な言葉で書かれているにもかかわらず、芸術・科学技術・環境や近代社会など幅広い分野への示唆を含んでおり、特に新入生におすすめです。

人文学部

須藤圭先生

読んでいない本について堂々と語る方法

ピエール・バイヤール著；
大浦康介訳

本を読むこととは、いったい、どういうことでしょうか？本に書かれている文章を正確に理解することでしょうか？それとも、書かれていない行間を読み解くことでしょうか？この本は、ちまたにあふれるハウツー本ではなく、「読書」という行為の実態と本質について、真面目に問いなおした一書です。わたしが、この本から学んだことは、ひとつの本を完璧に理解することは、どこまで行っても絶対ない、という事実です。本を何十回、何百回と読んだとしても、一字一句完璧に覚えることはできませんし、その本を書いた著者と同じ能力を身につけることもできません。そして、このことと同時に、「何かを完璧にこなそう」とか、「これだけは完璧にやろう」とか、そのように思ったとしても、完璧にやることは絶対に不可能だ、ということも学びました。

ひとつの本を完璧に理解することができないように、私たち人間は、たったひとつの物事でさえ完璧にやりとげることは絶対不可能で、誰しも不完全なものなのだ、ということです。「朝、起きられない…」「課題を忘れてしまう…」「本の内容も覚えていない…」でも、それでもよいのではないかと。人間なんて、所詮、不完全なものだから。そのように考えられることを、この本から学びました。以上、もっともらしく、『読んでいない本について堂々と語る方法』の書評を書いているわたしも、もしかしたら、この本を読んでいないのかもしれませんが、気になる方は、ぜひ、この本を手にとってみてください。

添田祥史先生

戦後日本の夜間中学：周縁の義務教育史

江口怜著

夜間中学を知っていますか？夜に授業をする公立中学校です。戦後の混乱期に、貧困や家庭の事情で昼間は仕事や子守で学校に通えない子どものためにつくられました。現在では、学齢を超過した義務教育未修了者や外国にルーツのあるひとたちが生徒層の中心になっています。国は都道府県と政令市に1校以上の夜間中学設置を表明しています。九州は、長らく夜間中学の灯が途絶えてましたが、2022年4月に福岡市立福岡きぼう中学校が開校し、来春には、北九州市、宮崎市、佐賀県、熊本県が夜間中学の開校を表明しています。そもそも夜間中学とは、なぜ、どのように誕生したのでしょうか。

本書は、夜間中学の歴史研究の金字塔との評価を得ています。先行研究を丁寧に整理したうえで、全都道府県をまわって独自に史料を収集し、関係者への聞き取り調査を重ね、夜間中学の成立と変遷の過程を周縁社会との関係で描き出しています。重厚な研究書でありながら、どこか温かい不思議な魅力をもった本です。

第8回生存学奨励賞、第11回東京大学南原繁記念出版賞を受賞。

坂本憲治先生

人を助けるとはどういうことか

エドガー・H・シャイン著；金井真弓訳

この本の著者エドガー・シャインは、私が尊敬する、大好きな援助者のひとりです。シャインはシカゴ大学で社会学を専攻し、スタンフォード大学・ハーバード大学大学院で心理学を学びました。アービン・ゴフマン(社会学の大家)、ゴードン・オールポート(パーソナリティ心理学の大家)、クルト・レヴィン(社会心理学の大家)という錚々たる研究者たちから社会科学を学び、かつ、精神分析的サイコセラピストとしての正当な訓練も受けている稀有な存在です。まさに「個人」と「集団・組織」を熟知したエキスパートといえるでしょう。その彼が「人助け」をどのように考えているか、大変興味深いと思いませんか。教育・心理・福祉といった対人援助職を目指す学生、こうした領域を視野に入れて就職活動をする学生にぜひ一読していただきたい本です。

人文学部



福嶋寛之先生

歴史学者という病

本郷和人著

BOOK

BOOK

ヤクザと日本：近代の無頼

宮崎学著

ヤクザは一般に暴力団として単純化され理解されている。しかし法や秩序からはみ出るアウトローだとして、なぜそうした存在が生まれたのか、あるいは生み出さざるを得なかったのか。それは日本の近代社会のあり方と深く関わるものであった、というのが本書の主張である。いわゆるヤクザは土木・炭鉱・港湾での荷役など、不安定な下層労働者が集う場で生まれた。ヤクザは資本家に対し労働力の供給業者として結びつきつつ、下層労働者を搾取しながら保護もする「親分」として存在した。それは公的扶助の仕組みが未熟で法の保護も十分に及ばない、日本が近代国家としては後発であったことに由来する。


労働者からすれば「親分」は職と貴重な日銭をもたらす存在だった。資本家も「親分」を介して労働者を確保し、国家権力もアウトローとしての彼等に警察的な役割を担わせた。ヤクザはまさしく明治以来の日本の近代化・資本主義化を下支えする存在であった。転機は1960年代の高度経済成長期に訪れる。機械化に代表される労働の急速な近代化、そして資本家・会社による全労働者の一元的把握がなされることで、ヤクザの「親分」としての役割は低下する。かくしてヤクザは厄介視・不要視されていく。考えてみればヤクザは堂々と事務所まで構えていたように、本当に非合法的な存在なのか頭をかしげてしまう。

本書は、著書本郷氏による「余はいかにして歴史学者となりしか」を、自身の幼少期から現在に至るまでの知的遍歴・人的交流の様態を交えながら、どのように歴史学研究へとたどり着いたのかを述べた、自分語りの作品である。実のところ評者は、大学で受けた最初の歴史学の授業に際し、衝撃的なつまらなさを感じた経験をもっている。その後、こちらに理解できるほどの素地がなかったことに一因あると気づくのだが、そのときは、歴史学という営みに対し研究者は一体どう理解しているのか誰か説明してくれと思ったものである。この点は歴史学研究にとどまらないだろう。様々な学問に出会う学生時代の入口において、既にそうした経験に遭遇している人もいないではないか。その意味でも、本書はなぜ、そしてどのようにその分野にたどり着いたのか、思索の過程が語られており参考になる。


もっとも本書がフィットする解答を与えてくれるかは別問題である。評者が最も反応したのも歴史学云々とは関係のない以下のような箇所だった。著者本郷氏は高校時代、本物の秀才たちに囲まれる経験のなかから以下のような思いへと至ったという。「自分には誇るべきものがない」……「自分にはできないことがある」とはっきり自覚したからこそ始まる人生もある、……わかった、それじゃどうするかこそが本当に大事なのだ私には言いたい(50頁)。評者も青年期、同じことを思ったことがある。世の中、同じことを考える人がいる。そうした出会いも読書の醍醐味だろう。

実際、マフィアを連想する欧米人からすると、かなり奇異に映るらしい(1959年、山口組組長は神戸市にて「一日署長」を務めたという。242頁)。しかし今や、平成の暴力団対策法によって、いわゆる「反社」として叩かれるに至る。別に擁護するわけではないが、本書で描かれた、ヤクザを生み出さざるを得なかった日本社会のメカニズム、下層労働者の問題はむしろ深刻になっている。ヤクザを放逐すれば済む話ではない。かつてヤクザが活動の舞台とした世界は、かえって制御者不在の混沌状況になっているのかもしれない。





櫛田久代先生




BOOK

キャンセルカルチャー： アメリカ、貶めあう社会

前嶋和弘著

タイトルの「キャンセルカルチャー(cancel culture)」とは、これまでの文化や伝統、歴史を否定する風潮を揶揄し、今日のアメリカ社会の分断を象徴する言葉です。この言葉は、米ドナルド・トランプ大統領が、奴隷所有を理由とした建国の父祖の記念碑撤去に対して、これまでの文化を否定する行為としてキャンセルカルチャーと批判し、リベラルな観点からの歴史の見直しに批判的な保守派に広がったと言われています。歴史的記念碑の問題は、その国の歴史とともにその歴史の延長線上にある現代をどのように捉えるかという論争的かつ一筋縄ではいかない問題を含んでいます。キャンセルカルチャーという言葉を通して、保守派とリベラル派との間の対立がより鮮明になりました。



BOOK

ポピュリズムとは何か： 民主主義の敵か、改革の希望か


水島治郎著

21世紀の世界はポピュリズムの時代を迎えたかのように言われます。実際、世界各国で、既存のエリート支配の政治を批判し、自らが民衆の声を直接代弁する者として民衆からの熱狂的な支持を獲得するポピュリストと言われる政治家やポピュリズムと呼ばれる政党や政治現象が躍進しています。しかし、「ポピュリズム」あるいは「ポピュリスト」についての説明を求められると、なかなか厄介です。というのも、ポピュリズムは、そもそも「人民(people)」という言葉から派生した言葉で、ポピュリズムと民主主義と決して相いれないわけではないからです。

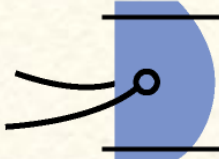
本書は、タイトルが示す通り、ポピュリズムとは何かについて、政治学的に解説しています。サブタイトルに、ポピュリズムについて「民主主義の敵か、改革の希望か」とあるのは、ポピュリズムが、民主主義に内在する矛盾を内在させているからでもあります。民主主義にとっての改革の希望というのは、ポピュリズムが、人民の立場から閉塞状況を打破し改革する運動となりえる側面があるとみるからです。しかし、一般的に、ポピュリズム現象が危惧されるのは、各国のポピュリズム現象において、移民やマイノリティへの排除等弱者の権利をあからさまに無視する言動が人気を集めているように、健全な民主主義を阻害する要因があるからです。ポピュリズムとは何かについて関心のある方にお勧めしたいのが本書です。

本書は、キャンセルカルチャーをキーワードに、BLM(ブラックライブズマター:黒人の命も大切だ)運動、同性婚、人工妊娠中絶問題、移民、銃規制等現代のアメリカ社会を二分する対立の現状とその背景についてわかりやすく解説しています。トランプ大統領以降のアメリカ社会をより深く知るための一冊です。






法学部




生田敏康先生



古代ギリシアの民主政

橋場弦著

古代ギリシア人が2500年前に生み出した民主政は、成年男子市民全員に等しく一票の投票権を与え、国家の意思を全体集会の多数決で決定し、任期1年の役人をくじ引きで選ぶ、という徹底した直接民主政であった(アリストテレスによれば民主政とは「順ぐりに支配し、支配されること」である)。本書は、最新の研究成果に基づき、その歴史としくみを述べるものである。本書は、古代ギリシアにおける市民参加のメカニズムを詳細に紹介するとともに、民主政の誕生、試練と再生、成熟、衰退を描き、後世における古代ギリシア民主政に対する評価の変遷をたどる。とりわけ、直接民主政を実現するために極めて巧みで徹底した手法が執られていたことに驚かされるとともに、民主政がかなり後世



サラ金の歴史： 消費者金融と日本社会

小島庸平著

本書は、いわゆるサラ金(サラリーマン金融=消費者金融)のその前史から現代にいたる100年間の歴史を考察するものである。なぜ営利企業であるサラ金は貧困層に貸し付けたのか、いかにサラ金が貧困層を金融包摂(金を貸して所得を増やす機会を提供すること)してセーフティネットを代替することができたのかという問題を解明するため、本書は「金融技術」と「人(サラ金創業者の個性・創造性)」に視点を充てる。一般にサラ金というと、借りる側の窮状に付け込んで暴利をむさぼり、強引な取り立てにより多くの家庭を崩壊させたという非人道的な側面が強調されがちであるが、

までしぶとく生きながらえていたことが近年の研究から明らかにされる(民主政の衰退時期と考えられていた紀元前4世紀が実は民主政の成熟期であり、紀元前1世紀のローマによるアテナイの陥落まで民主政の命脈は保たれていた)。しかし、古代ギリシア民主政に対する後世の評価は低いものであった。いわゆる「衆愚政」のレッテルが貼られたのである。民主主義が普遍的な価値として認められるようになったのは、せいぜい第2次大戦後以降にすぎず、近代民主主義の歴史は意外と底が浅いと著者は言う(これに対して古代ギリシア民主政は400年以上の命脈を保った)。

もちろん、(わが国を含めた)今日の民主主義は古代ギリシアの直接民主政と全く違う。市民一人一人が政治権力を行使するのではなく、代表者に権力をゆだねる代表民主制(間接民主主義)がとられていることは周知のとおりである。しかしそれゆえに、主権は国民にある(国民主権)といっても、抽象的で空虚な理念になりがちであることは否定できない。その意味で市民全員が政治に参加し、政治権力を行使した古代ギリシアの民主政は、市民が真に政治に参加し、「分かちあう」ことが求められる現代社会に一つの示唆を与えるものではないだろうか。

本書はサラ金の経済的・経営的合理性を内在的に理解しようと努める。著者みずから述べるように、サラ金が成長した歴史的背景を、利用者とサラ金業者の双方の資料を突き合わせて跡づける作業はこれまでほとんどなされていなかった。

本書は経済学者(経済史)によるものであるが、利息制限法と貸金業法という消費者法の観点から見ても興味深い材料を与えてくれる。サラ金というこれまで本格的な研究の対象とされていなかったものを扱った点で斬新であり、読み物としても大変面白い。本書は、テーマの選定と方法論において社会科学を学ぶ者にとって手本となるものである(本書は2021年サントリー学芸賞を受賞し、2022年新書大賞第1位になった)。



法学部

生田敏康先生

日米地位協定： 在日米軍と「同盟」の70年

山本章子著

現在、日本国内には多くのアメリカ軍の基地（在日米軍基地）が存在する。そして在日米軍の航空機・ヘリコプター等による事故や軍人および軍属（軍によって雇用されている者）による犯罪は後を絶たない（とりわけ基地が集中する沖縄において深刻な問題である）。これらの事故や犯罪が多発すること自体も問題であるが、これらが日本の国内法によって規律され、公平に裁かれているかといえ、実態はそうではない。その理由は、日米地位協定によって在日米軍および軍人等の特権的地位が認められているからである。

日米地位協定（1960年以前は日米行政協定）は、日米安全保障条約（安保条約）に基づき、在日米軍や軍人・軍属の日本国内における法的地位に関して日本とアメリカの間で締結された協定である。

経済学部

武井敬亮先生

本書は、在日米軍の駐留という観点から、戦後日米関係の歴史を振り返りながら、日米地位協定の理解を目指すものである。本書は、日米地位協定締結に至る過程とその後の運用をたどり、日本と同様に米軍基地を有する外国（ドイツやイタリア）の事情と比較することにより、在日米軍の特権的地位の多くが、協定の条文自体ではなく、近年まで非公開だった「日米地位協定合意議事録」に基づく運用から生じたものであることを暴く。こうした状況のもとアメリカが在日米軍の既得権益を維持しようと腐心し、日本政府も日米地位協定の改定に消極的な姿勢をとり、この問題を沖縄基地問題に矮小化する実態が描かれる。

自由論

J・S・ミル著；関口正司訳

BOOK

ここ最近、迷惑行為がSNS上にアップされ、炎上・社会問題化するケースが後を絶ちません。その行為が法に反する場合は、当然、法によって処罰されることとなりますが、他方、法に反しないからといって好き勝手やってもいいということにはなりません。例えば、路上喫煙が禁止されていないところでの喫煙を考えてみましょう。禁止されていないからといって、周りに歩行者がいる中で喫煙することが、果たして許されるのでしょうか。この問題は、言い換えると、「個人の自由はどこまで認められるのか？」ということになります。この問題を考えるにあたり、J. S. ミルの『自由論』（特にその中の「他者危害の原則」の話）は大変参考になります。ぜひ本書を手に取り、この問題について考えてみましょう！

本書は、日米地位協定の考察を通じて戦後史、日米関係および沖縄問題について問題提起をし、新たな知見を提供する点で有益な文献であり、かつ、このテーマに関する数少ない普及書である。ただ、本書を理解するためには、戦後の日本政治史や日米関係に関する基礎知識が必要である。こうした知識がない人は、日本史や政治・経済の高校教科書で関連する部分を復習してから本書を読むとよい。憲法や政治そして沖縄に関心をもっている人に一読をお奨めしたい（本書は2020年石橋湛山賞を受賞した）。

アダム・スミス：『道徳感情論』と『国富論』の世界

堂目卓生著

アダム・スミスは『国富論』（「神の見えざる手」）によって「経済学の父」として知られていますが、スミスの名を一躍有名にしたのは、先に書かれた『道徳感情論』によってでした。かつては、「道徳（公益）を説くスミス」と「経済（私益）を説くスミス」、どちらが本当のスミスなのかという問題（「アダム・スミス問題」）がありましたが、今では両者に矛盾はないとする解釈が主流になっています。それでは、道徳と経済はどのように結びついているのでしょうか。本書は、『道徳感情論』と『国富論』のエッセンスを分かりやすく解説しながら、両著作の統合的な解釈を提示しています。もしかすると、スミスを自由放任主義者と理解している人もいるかもしれませんが、本書を読むことによって、それとは違ったスミス像が見えてくると思います。

BOOK

武井敬亮先生

スティグリッツ PROGRESSIVE CAPITALISM

ジョセフ・E.スティグリッツ著；山田美明訳

行き過ぎた資本主義による弊害が、金融危機、格差問題、環境問題、戦争など、さまざまな場面で見られるようになってきた昨今、あらためて資本主義について考える必要があるのではないのでしょうか。本書の著者スティグリッツは、ノーベル経済学賞を受賞した経済学者であり、アメリカの経済政策にも深く関わってきた人物です。本書でスティグリッツは、資本主義の問題点を指摘するとともに、その解決策についても議論しています。議論のポイントは、資本主義を諦めるのではなく、その枠組みの中で、どのようにして現状を改善していくのか、という点にあります。本書のタイトルにもなっている「プログレッシブ キャピタリズム」とはいかなるものであるのか。本書を手にとって、ぜひその意味について考えてみましょう。

BOOK

山崎好裕先生

貨幣改革論；若き日の信条

ケインズ [著]；宮崎義一，中内恒夫訳

ケインズは20世紀を代表すると言われる偉大な経済学者である。1930年代の世界的な不況の只中で、それまでの経済学が見出せなかった不況脱却の処方箋を書いた。その後で、ケインズは若い日々を振り返って、当時を知る友だちに向かってクラブで朗読したのが、後に『若き日の信条』として出版された文章だった。ケインズがケンブリッジ大学の学生だったころだから、ちょうど

BOOK

皆さんと同じような年ごろである。当時彼は、経済学ではなくて倫理学に熱中していた。ケンブリッジ大学と言えば、イギリスの歴史ある名門大学。ケインズ自身も語っているように、彼と彼の友人は鼻持ちならないプライドの塊であった。若い倫理学の教師ジョージ・エドワード・ムーア思想にケインズたちは夢中になった。ムーアは善というものが、決して言葉で定義できないとしていた。ムーアによれば、善を理解するのは色を理解するようなものである。生まれたときから目が見えなかった人に、黄色の色を言葉で教えることは不可能だ。だから、黄色の把握は言わば直感的なものだ。善も一緒であって、直観によってしか判断することはできないのである。しかし、現実問題として人間の直感の正しさを絶対的に信じることはできなかったムーアは、次善の策として伝統的な道徳に従うことを勧めた。それが若いケインズたちには我慢ならなかった。若いエリートたちは、世間の道徳や因習をバカにしていたのである。このことをケインズ自身が印象的なフレーズで振り返っている。「私たちはムーアの宗教を受け入れて道徳を拒絶したのだ」と。若いケインズたちにとって、世の中の道徳は金銭的な損得勘定のように感じられた。しかし、この文章を読み上げたときの、老成したケインズは振り返っている。私たちは文字通り危険な若者であったと。そして、それからの長い歳月のなかで、社会のなかで育まれてきた習慣や考え方のなかにも、本当に大切なものがあると気が付いたと。私もそうであったが、君たちも世の中に反発したい若さを今持っている。一度本書を読んで、ケインズはこう考えたが、自分は将来、今の自分をどう思い返すだろうかという空想に耽ってみるのも面白いかもしれない。

経済学部

山崎好裕先生

善の研究

西田幾多郎著

BOOK

日本で最初の独創的な哲学者・西田幾多郎が世に出るきっかけとなった著作『善の研究』は、私が中学生のときの文字通り座右の書であった。中学生の私は寝るときに枕元に必ず文庫版のこの本を置いて読み、眠くなると灯りを消していた。だから、高校時代も最後の最後まで、西田が教鞭を執った京都大学に進学して哲学を専攻しようと思っていた。しかし、私の高校の教員から、東京大学を受験してくれないかと頼まれ(これ、ホントの話)、東京大学の経済学部で学ぶことになった。だから、こうして経済学者として本学の経済学部として教えているのである。この本はとても古い本である。現在の東京大学教養学部にあたるのが、戦前の旧制第一高等学校である。今の東京大学の新生も全学部とも教養学部で1・2年生の時期を過ごすからだ。その時代に一高生たちがよく読んだ著作のリストにこの本は入っていたはずだ。

その意味で私は中学生時代、半世紀ほど遅れてきた一高生だった。ただ、今でも思うが、この著作は現在も若い人であれば直面する、自分と世間、自分と他人とを折り合わせることの難しさに焦点を当てている。だから、今の若い人が読んでも何か心打つものがあるのではないかと思ひ、読書を勧めているわけだ。若い人は自意識が旺盛なので、他人と自分を比べて悩んだり、他人のことがよく理解できないと苦しんだりする。西田という明治の青年も同じように苦しんでいたようだ。西洋の哲学を学んだり、自分でも思索をしたりして(西田は額に脂汗を浮かべながら苦悶の表情で思索したという!)、西田はある真理に到達する。それは「我あって経験あるに非ず、経験あって我あるなり」というものだ。自意識を忘れてあることに熱中したり、風景に埋没したりするとき、人々は自由になれる。この状態を西田は純粹経験と呼ぶ。この純粹経験を後で振り返ったときに初めて、自分という存在が確認できたり、他人という存在を認識できたりするというのだ。だから、自意識の呪縛に悩む必要はない。自分自分と思わずに、他人と自分を包み込むより大きな自分になることが大事だ。私自身、こう思って本当に安心できたことを記憶している。ませガキだね。

和辻哲郎は倫理学者であるが多彩な業績を残した著述家だ。世界各国の人々の生活をその土地の自然から説明した著作『風土』は、今なお読み継がれる名作である。また、若き日の著作『古寺巡礼』は珠玉の紀行文である。それでも、やはり、彼の研究の中心は日本の倫理思想であった。日本人はどのようなことを正しいと考え、どのようなことをしてはいけないと戒めてきたのか。

和辻の研究成果は、岩波文庫から4分冊で出ている『倫理学』で読むことができる。長い著作にはなるが、和辻の文章は平明で誰にでもわかりやすいので、読むのに困難はないであろう。和辻は、一人であっても人間とは言いが、元々人之間ということでも人間社会を指す言葉であることに注目する。個人があつて社会があるという西洋的な考え方は日本には馴染まないのではないか。日本人は世間に見られる人間関係、つまり、間柄(あいだがら)を第一に考えてきたのではないかと思ひ至ったのである。つまり、社会的な関係性こそが根源的であつて、個人の独立性は二次的なものであるということだ。こういう考え方に基づいて、和辻は家族という最小の単位から国家に至るまでの理論を著作にまとめた。同じようなことを試みた哲学者にドイツのゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルがいる。彼も家族から著述を始めているが、その家族は個人として独立した男女から成る近代的なイメージで語られている。それに比べると和辻の家族のイメージは、戦前の日本で見られた大家族である。個人は大家族のなかの一員として、その中に埋没している。全体として和辻は個人の独立性よりも共同体の一体性を強調している。それは古い戦前の考え方だと言ってしまえばそれまでだが、現在も保守政治家や某宗教団体が伝統的な家族倫理を主張していることを考えると現在ともあながち無縁とは言えないのかもしれない。そうした保守的な倫理観がどこからやってきているのかを考える上でも、今一度和辻の著作を読んでおくのは無駄ではないだろう。それが批判的な読書というものではないだろうか。若い人たちには世間に蔓延する考え方を鵜呑みにせず、一度自分で考えてみることをお勧めしたい。

倫理学

和辻哲郎著

BOOK

商学部

明神実枝先生

1からのデジタル・マーケティング

西川英彦, 澁谷覚編著

LINEでクーポンを手に入れた、インスタグラムに商品の画像をアップした、という時に、私たちは既にデジタル・マーケティングに関わっています。ただし、関わっていても、それらの仕組みは知らないのではないのでしょうか。そして、知りたいと思っても、市場の変化が著しく新しい概念や理論が次々に登場するので、初学者には難しいようです。

本書は基本が分かるよう概念と理論が選ばれ、内容に偏りがなく、体系的にデジタル・マーケティングを理解できる標準的なテキストです。アマゾンや食べログ、メルカリ、無印良品などの身近な事例が紹介されているので、楽しく理解できます。デジタル・ビジネスの構築を期待されている若い世代の皆さんに、ぜひ手に取ってほしい一冊です。本書は「日本マーケティング本大賞2019 大賞」を受賞しています。

進化するブランド：オートポイエーシスと中動態の世界

石井淳蔵著

本書のテーマは「日本特有のブランドはどのように生まれたか」です。欧米の著名なブランド研究者は、日本のブランドが欧米のそれとは異なると指摘します。ヤマハの名前の下にバイクもピアノも売られていること、ソニーの名の下に映像・音響機器、生命保険、音楽、映画、ゲームソフト等が売られていることは、私たちにとっては当たり前ですが、欧米のブランドにはあまり見られない現象のようです。

本書は、日本語の中動態に潜んでいる思想を尋ね、生物・生命の動きを説明するオートポイエーティック・システムの助けを借りて、日本特有のブランドの誕生と成り立ちを明らかにしようとしています。ブランド・ビジネスに関心のある上級者向けの1冊ですが、言語文化に詳しい人文系学部の皆さんや、生物・生命に造詣の深い理系学部の皆さんが読まれると、より深い理解に到達されるのかもしれません。

杉本宏幸先生

街づくりのマーケティング

石原武政, 石井淳蔵著

みなさんの周りに商店街はあるでしょうか？令和3年6月時点で福岡市には136の商店街「組合」が存在します(令和3年度 福岡市商店街実態調査報告書)。福岡市による再開発促進事業「天神ビッグバン」を使って複合商業ビルに変わる予定(2023年3月時点)の新天町商業協同組合の名前を聞いたことがある人は多いかもしれませんが。他にも、福岡市科学館と裁判所ができて大きく街が変わった中央区の六本松商店連合会、主に鮮魚の卸売と小売を担う中央区の柳橋連合市場、「博多の台所」である博多区のみのみしま連合商店街振興組合、主にアジア地域での多文化共生を掲げる博多区の吉塚市場リトルアジアマーケット、リヤカーでの販売形態が特徴的な早良区の西新商店街連合会など、際立った活躍が目立つ商店街組合が福岡市は少なくありません。複数の小売店が集まって商店街組合をつくるのは、「協同して経済事業を行なう」(商店街振興組合法第一条)ことがお店にとっても、それらを支援する行政にとっても合理的だからです。しかし、ルールを作って組合ができればそれが機能するかという現実とは違います。なぜなら、商店街と地域を動かすのは「人」だからです。本書は、商店街(組合)における活動、組織、そして人について、学会をリードする研究者達によって調査報告されたものです。私は本書を1993年に読み、2018年に(福岡市で)商店街とかかわりましたが、商店街の現場で活躍なさる皆様から初めてお聞きすることの多くはどこか既視感がありました。それは多くが本書に書いてあったからです。それほど本書は、商店街問題の本質的な部分を捉えています。商店街に関心がある方、これから関わろうとなさる方みなさまに一読をお勧めします。

商学部

村上剛人先生

杉本宏幸先生

BOOK

BOOK

地理学で読み解く流通と消費： コンビニはなぜ集中出店するのか

土屋純著

コンビニがある場所に集中的に出店すること、百貨店や商店街がかつてのように繁栄しにくくなっていることを目にしたことはないでしょうか？本書は、地理学の立場から（都市や地域がどのようにあるかという観点から）こうした問題を説明しようとしています。福岡市で目立った動きがある商店街は、地域住民や企業、文化とつよく関わりながら様々な取り組みをしています。流通や消費は、都市や地域のあり方と密接に関わるわけです。本書をお勧めしたいのは、流通に関心がある方、流通のことを少し学んだ学生さんです。参考文献もきちんと記されていますから、卒業論文でこうした課題を扱うための入口にしたいという学生さんにもお勧めします。高校までの学習で見聞きした用語も出てきますが、特に高校で地理を選択していなくても読み進められると思います。

私は流通・マーケティング(商学)を専門にしています。私が専門にしている分野では、主に「取引」や「企業間関係」から流通を見ます。しかし、海外(例えば、イギリス)では、流通の研究が地理学と不可分になされています。地理学を基礎にした流通および消費の知見は極めて重要です。特に、本書が扱っている人口減少地域や災害時におけるライフラインとしての流通という問題は現代的な課題です。自分が住んでいる地域の小売店、商店街、スーパー、百貨店などがどのようなものか考えながら読み進めると得られるものが多いと思います。一読をお勧めします。

アフターデジタル： オフラインのない時代に生き残る

藤井保文, 尾原和啓著

これからの社会のインフラはどう変わるのか新型コロナが広がる2019年に出版されたのが本書です。この本はこれからデジタル社会へ転換する中で、企業や私たちユーザーがどのように対応していく必要があるのか、現在のリアルで展開されているアナログの部分とインターネットを活用しているデジタルの部分の関係をいかに考えていくべきなのか、問題提起を行っています。マーケティングの分野で小売企業の戦略としてオムニチャネルが挙げられています。

これはアナログとデジタルの2つの部分を融合させる方法として登場してきていますが、今後益々アナログの部分にもキャッシュレスに見られるように、デジタルの取り組みが浸透してきています。これからの私たちの社会のあり方、さらには企業戦略を考えていく上において、重要な見方を提示しています。ぜひ、これからの社会を深く考えてみようと思っっている学生の皆さんは是非手に取って読んでみてください。事例も豊富に入れて説明されているので興味深く読める本です。

「新訳」経験経済：脱コモディティ 化のマーケティング戦略

B・J・パインII,
J・H・ギルモア著；
岡本慶一, 小高尚子訳

BOOK

これからのマーケティングにとって重要な経験価値をいかに考えるか？パイン&ギルモアの共著である経験経済の著書が1999年に刊行され、その後、流通科学大学出版から電通「経験経済」研究会の翻訳書が上程されたのですが、その後重要な部分の新訳として本書が刊行されています。これまでモノやサービスをいかに差別化するのかということにフォーカスしていた企業のマーケティング活動でしたが、

2000年を境にそれを超えてユーザーが体験することに価値があるといった新しい見方を提示し、マーケティングの研究分野に刺激を与えています。現在、「コト」マーケティングや「エモ」マーケティング(エモーショナルマーケティング)など人々が行うことや感じることに価値があるという見方からユーザーの活動を再点検し、企業の戦略を見直していくことが求められています。まさにその経験価値を考えていくヒントをたくさんくれるのが本書です。講義の中でも考えてもらっていますが、ショッピングセンター価値を経験価値から考えたらどんな取り組みができるのか、そうしたことを考えるヒントがたくさん紹介されています。商学部の学生の皆さんは、一度は読んでみて、企業の活動のあり方を考えてみてください。